

怒ってなんかないです

feblemind

「弥生、怒ってなんか……ないです」

椅子に座ったまま、弥生は膝の上の握りこぶしを眺めていた。よそ行きのスカートを握りこんだ拳は嘘みたいに白くなっていた。

これで何度目だろう。弥生は奥歯を噛み締めた。

「まあ、まあ、ヤヨイさん。落ち着いて」

おちついたバリトンに促され、弥生はゆっくりと顔を上げた。目の前に座った白衣の男は柔和な笑顔を浮かべていた。

男の名札には高城とある。注視すれば主任カウンセラーの名刺が視界の隅にポップアップすることだろう。

中肉中背、体格指数は22程度の健康体。傍らには湯気を立てるコーヒークップ。もちろん、デカフェ。威圧感を与えぬよう背後の低い棚には深緑色の布が掛かっているが、弥生はその下に精神医学関連の書物が並んでいることを知っていた。

「こは、あなたが偉大な義務を果たされた場所とは異なります。誰もあなたを追い詰めるようなことはありませんよ」

「はい」

「ですから、あなたが誰かに対して怒ったりする必要も、ないんです」

諭すような口調で高城は言う。馬鹿にすることもなく、慇懃無礼に陥ることもない。ましてや威圧感を帯びるなどありえない。極めて洗練された当代流のコミュニケーション。弥生はただ、はい、はい、と抑制的な口調で答えるだけだった。

「だから、ヤヨイさん。どうか、感情を抑えて」

高城の口調はスローダウンする。弥生は無言でうなずいた。

深海禍は人類に大きな被害をもたらした。深海棲艦による攻撃の直接の犠牲になった者もそれなりにいたが、それ以上に深刻だったのが精神疾患だった。家族や友人を失い、あるいは戦火の中で暮らすことは精神に多大な負担を強いる。ショックینگな写真や動画、それによって引き起こされる悲憤、決定的な手を打てない同胞たちに対する憤り……それらがSNSの上を燎原の火のごとく燃え広がった。あるIT企業の調査によれば、SNS上を最も高速に伝わる感情はどうやら「怒り」であるらしい。虚実ないまぜになった怒りと憎しみが、人々の心に蹴爪を立て、一秒間に7.5週の割合で惑星表面を駆け巡った。

深海禍が終息し生活が安寧を取り戻してなお、多くの人間が病み、精神疾患が世界の疾病負荷の上位を独占していた。すっかり平和になった星で誰かが声を上げた。深海禍は終わった。我々は怒りや悲しみに別れを告げるべきだ！と。かくあれかし！多くの人がそれに賛同した。

「さあ、どうぞ、笑って」

高城に促されるまま弥生は笑った。顔面神経痛みたいな笑みだったが、それでも高城はそれを良しとして、ひときわ目を細めて頷いた。

弥生が高城の元を訪れたのは望んでのことではなかった。今朝、弥生が食料品店で食べ物を買おうとしたとき、彼女の仏頂面に恐怖を感じた店員がアラートを発したのだった。

駆けつけた警備ドローンは弥生のIDを治安維持権限でスキ

ヤンし……彼女が「感情的にチャレンジされた人物」であることを知って担当カウンセラーである高城に一報を入れたのだ。

深海禍が終わって三十年。復興した人類社会は壊れる前よりも強固なものになっていった。もちろん、それは壊れる前と同じではない。人々は怒りや悲しみに決別することを望み、それを実現しようと行動した。もはや怒りは公共の場にふさわしい感情ではなくなっていた。怒りは他人の心に攻撃を加えるもので……公共の場でそれを発露することはむき出しの刃物を往来で持ち歩くに等しい蛮行だった。

ゆえに、寝起きで不機嫌な弥生を迷わず通報した店員は、別に悪意があったわけではない。それは攻撃に対する現代人の至極まっとうな反応だった。

「……先生、あの……私は、コミュニケーション補助器は使えないんですか」

笑顔の口の形を保ちつつ、おずおずと弥生は口を開いた。

この安定した社会にあっても、洗練されたコミュニケーションが取れない人間はいる。その最たる例が子どもである。だが、社会は子どもを排斥したりはしない。子どもは未来の象徴で、希望で、大切に、寿ぐべきものだからだ。そのため、社会は子どもに正しいコミュニケーションの流儀を伝える。それはかつては親の役割とされていたことだが……今日的には洗練されていないコミュニケーションを特定少数の人間に押し付けるのは、あまりに感情負荷が大きすぎて非人道的であると見なされていた。

そこでコミュニケーション補助器が使われる。後頭部へとインプラントされる高分子製のそれは、「着床」として生体親和

性の高い端子を脳の各所へと広げる。そして持ち主がコミュニケーションを——言語的であろうと非言語的であろうと——取ろうとしたとき、ブローカ野に干渉することで発話に対して「丁寧化」を施すと同時に、視床下部にも干渉してあらまほしきコミュニケーションに対して正の情動を、そうでないコミュニケーションに対して負の情動を喚起する。この巧妙かつ叡智に満ちた装置——コミュニケーション補助器——と二人三脚で暮らすことで、親は心安らかに、子どもは誰に迷惑をかけることなく、自然と望ましい流儀を身につけることができるようになるのである。コミュニケーション補助器は言わば出来の良、機械じかけの乳母のようなものと見なされていた。

「残念ですが……、ヤヨイさんはその……鎮圧要員として仕事をされていたでしょう？」

「……はい」

未だ耳慣れぬ言葉に弥生は一拍考えてから答えた。深海棲艦鎮圧要員。かつては艦娘と呼ばれていたが……その呼称が差別語として公共の場から消えて二十年が経っていた。もはや代替語の「鎮圧要員」という単語にさえ、ある種の隠微な……忌まわしい響きがつきまとうのだった。

「お力になれず申し訳ないのですが、当時の人工神経を持った方にコミュニケーション補助機は禁忌なのです」

高城はいかにも申し訳無さそうに、眉間にしわを寄せて言った。鎮圧要員……艦娘は反応速度向上のため、感覚神経と運動神経の一部を白金線^{プラチナワイヤー}で置き換えていた（電気信号を伝える際に、神経鞘の電位差を使うのはあまり賢いやり方ではないのだ）。その特殊手術に加えて恐怖を克服するための

報酬系への電気刺激デバイスの埋め込みと暗示措置……
いづれも必要性からなされてことではあったが、これらのテク
ノロジーは神経系への干渉を行うがゆえに、同じチャネルを利用
するコミュニケーション補助器とは甚だ相性が悪かった。

高城の答えに弥生はうなだれた。

「ヤヨイさん、大丈夫ですよ。元気をだしてください。行動療法を続けていれば、ふつ……あなたらしく暮らせるようになります」

高城は言い直して、繕うように口角を上げて笑った。「普通」という言葉は抑圧的で……多様性に反するものだった。

* * *

結局、弥生の一日はめちゃくちゃになってしまった。本当は髪を切ったり、ちよつと良い日用品や服を見て回る予定だったが、高城との臨時セッションが終わって彼のオフィスを出た頃には日は傾いていた。

弥生は何もせず、自分のマンションに戻ってきた。うつむいたまま共用部の廊下を歩いていると、視界に顔認識に失敗したことを示すアラートが所在なげに上がった。弥生は自室のドアの上に掲げられたカメラを睨めつけた。

「ただいま」

発声と同時に玄関の顔認識カメラが弥生の仏頂面を捉えた。程なくして仏頂面はカメラ内部の端部ニューラル計算モジュールによって音声とともに処理され、感情の推定値が付与される。「怒りと悲しみの徴候が見られます。心の健康を保ちましょう。ワンポイント…40℃前後、ぬるめのお風呂がおすすめで

す」

薄緑と桃色に彩られたモーターが心理的に安全な速度と慣性を保ちつつ弥生の視界の隅にフェードインした。同時に給湯器の設定温度が42℃から40℃へと切り替わる。

「怒ってなんかいいです、怒ってなんか……」

弥生はつぶやいた。涙がこぼれそうだった。怒りと同様に、悲しみもまた好ましいものではなかった。激しい感情はすべて伝染するものであり、人々の安寧の日々を侵すものだからだ。怒りにせよ、悲しみにせよ、感情の異常を示すアラートの回数がしきい値を超えれば、高城に連絡が行く。高城に迷惑をかけることを弥生は申し訳なく思っていたし……社会的に正しくない表現をすれば……その介入を「疎ましい」とさえ思っていた。

弥生は間接照明に照らされた廊下を歩きながら、怯えた顔で壁に背をつけた店員を思い出した。笑顔のまま彼女をなだめようとする高城のことを思い出した。ぐつ、と弥生は奥歯を噛み締めた。彼女はハンドバッグを投げ捨て、寝室へと走った。衝撃センサーが異常を感じたがご構いなしだった。ベッドの上には灰色の、大きな卵型の殻が天蓋のように覆いかぶさっていた。弥生はその卵型の殻——安全房——の中に外出着のまま身を滑り込ませ、フェルト状の蓋を内側から閉めた。

安全房は特殊な繊維で編まれた一種の個人用電波暗室である。その生地は可視光を含むほぼすべての周波数の電磁波に加えて、超音波通信も阻害する。安全房の中においてはあらゆる感情の発露が許されていた。どれだけ怒りくるっても、泣きわめいても、その想いが外に伝わって誰かを傷つけることはないからである。感情を抑え込むことが好ましくないのは、医学的

にわかっていた（ゆえに規制されるのは公共の場での感情の発露に限られる）。弥生のような「感情的にチャレンジされた人物」にとっては特にそうだ。そのため弥生はこの高価な装置を保険適用のもと、非常に安価に購入することが出来た。

ぼう、と安全房に備え付けの照明が黄色っぽい光で内部を照らし出した。心地よくも狭苦しい殻の中で弥生は安全房の内側に貼り付けられた一枚の写真を見た。電波も電力を必要としない、植物性テキスタイルへと焼き込まれた写真。そこには赤い髪をした少女が写っていた。

「うーちゃん……」

写っている娘の名前は卯月といった。彼女はもうこの世にいなかったが……生前は弥生の妹分であり、同じ職場で鎮圧要員としての任についていた。卯月はいつも悪戯ばかりしていた。その悪戯には笑えるものもあつたし笑えないものもあつた。弥生は時に怒ったような顔をして卯月を見過ごし、あるいは本当に機嫌を損ねたり、怒ったりした。それはとても粗野で、野卑で、許されなくて……かけがえのない日々だった。

「卯月……うーちゃん……」

それから弥生は泣いた。泣き声は安全房の壁に吸収されて、骨を伝った音だけが弥生の耳に届いた。しばらく泣いたあと、弥生は外出着の袖で目元を拭った。安全房の灰色の裏地が押し包むように、押しつぶすように、弥生を取り囲んでいた。弥生は膝を抱えて目を閉じた。よそ行きのスカートにしわが寄ってしまうかも知れない。そんな事を考えながら。

眠ればまた、穏やかで笑顔に満ちた明日が始まる。

初出…『艦これディストピア合同誌 デイストピア・ブルー
—統制海域—』 雷鳥旅行 二〇二〇年